

(3) 国際生活機能分類 (ICF) による大学生生活の評価と心拍数による身体活動強度の推定

— 肢体不自由のある大学生を対象とした事例研究 —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉マネジメント学専攻 修士課程 三田 岳彦
川崎医療福祉大学大学院 医療情報学専攻 博士課程 三上 史哲
川崎医療福祉大学大学院 医療情報学専攻 博士課程 樫部 公一
川崎医療福祉大学 医療秘書学科 今林 宏典

【要旨】

本研究は、大学に於ける障害学生支援体制の整備、充実に資する基礎研究として、肢体不自由のある女子大学生を事例対象に、国際生活機能分類 (ICF) を活用して学校生活における生活機能と障害を評価した。また、心拍数の長時間記録を手がかりに身体活動強度を推定し、ICF に反映されない身体的な負担度や弊害についても検討した。被験者は脳性麻痺による四肢麻痺があった (機能障害)。そのため、歩行および移動に活動制限があり、それは滑りやすいスロープや手すりのない階段など環境的な阻害因子によってさらに増大した。被験者の友人や同僚との関係は学業や学内コミュニティへの積極的な参加を促すものであったが、一方で、普段コミュニケーションのないあるいは少ない対人関係や社会的態度は疎

外感や参加制約をもたらした。心拍数記録からは、この障害学生の通常歩行や最速歩行の身体活動強度が、それぞれ、健常学生の最速歩行や走行の強度に匹敵することが明らかになった。本研究の結果から、障害学生の支援を企画・実施する際には、物理的な環境の改善のみならず、障害の理解、対人関係、社会的態度に関わる教育・啓発、また、日常生活での過大な身体的負担に起因する過用症候や合併症の予防などに考慮すべきことが示唆された。また、多岐にわたる支援を組織横断的にコーディネートする際に、その専門領域である経営学の豊富な知識が有効に活用できると考えている。なお、本研究は肢体不自由のある大学生 1 名を対象とした事例研究であったが、引き続き被験者数を増やし、研究成果をより一般化していきたい。